

萩市における幼児期のおやつ の現状と親の意識

国広 勝代, 石川 正一, 八尋 茂樹

A Note on the Reality and Parents' Attitude regarding Preschool Children's Snack in Hagi City

Katsuyo Kunihiro Shoichi Ishikawa Shigeki Yahiro

キーワード： 萩市 幼児 おやつ 親の意識
Hagi City infant snack Parents' Attitude

1 はじめに

現代の青少年問題を考えるとき、社会環境や生活形態の変化が取りざたされ、親子間コミュニケーションの希薄さ、生活習慣の乱れ、地域の教育力低下などが問題視される。

いま、その解決の糸口として注目されているのが「食育」であり、平成17年に「食育基本法」が制定された。附則において『子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身につけていくためには、何よりも「食」が重要である。』と明言している。さらに、第5条において（子どもの食育における保護者、教育関係者等の役割）、第13条において（国民の責務）、第20条において（学校、保育所等における食育の推進）と幼稚園・保育所が積極的にかかわることが期待されている。

また、一方で「食」の安全上の問題も社会問題化しており、食生活については家庭でも少なからず関心が向けられているのではないと思われる。

さて、幼児期の子どもにとっておやつは栄養補給の意味をもつと同時に楽しみや心理的満足感を伴う大切な食べ物である。しかし、おやつはそのほとんどが親の手作りから市販の製品に変わったと1986年東海女子短期大学「附属幼稚園児の間食に関する調査」で報告されている。

近年の「食育」への社会的動きが実際に家庭生活に反映しているのか、幼児期を中心とした萩市におけるおやつ の現状と親の意識を調査し、その実情を明らかにすることとした。

2 研究の内容

子どもに与えているおやつの実態及びおやつに関する意識や考え方などを把握するため、質問紙法による調査を実施した。

(1) 対象及び方法

萩市内の全園（幼稚園2園・保育所20園）に在籍する3歳児以上の保護者を対象に所属園を通して調査紙を配付・回収した。

<回答数> 父母 764人（有効回答数は項目によって異なる）

<回収率> 81%

(2) 調査時期 平成19年12月

(3) 調査内容

市販のおやつについて	5項目
手作りおやつについて	6項目
おやつ作りについて	3項目
おやつの与え方・食べ方等	12項目
子育てについて	3項目
その他（家族構成等）	3項目
合計	32項目

(4) 調査結果と分析

◆対象となった園児の父母の属性は次に示すとおりである。

回答者	父親	32人 (4.2%)
	母親	729人 (95.5%)
	その他	2人 (0.3%)
年齢	10代	1人 (0.1%)
	20代	114人 (14.9%)
	30代	542人 (70.9%)
	40代	103人 (13.5%)
	50代	4人 (0.5%)
子どもの人数	1人	134人 (17.5%)
	2人	376人 (49.2%)
	3人	223人 (29.2%)
	4人以上	31人 (4.1%)
職業形態	常勤で勤務	221人 (28.9%)
	自営業	61人 (8.0%)
	非常勤（パート）で勤務	292人 (38.2%)
	専業主婦（夫）	190人 (24.9%)
家族構成	核家族	508人 (67.6%)
	三世同居	203人 (27.0%)
	四世同居	37人 (4.9%)
	その他	3人 (0.4%)

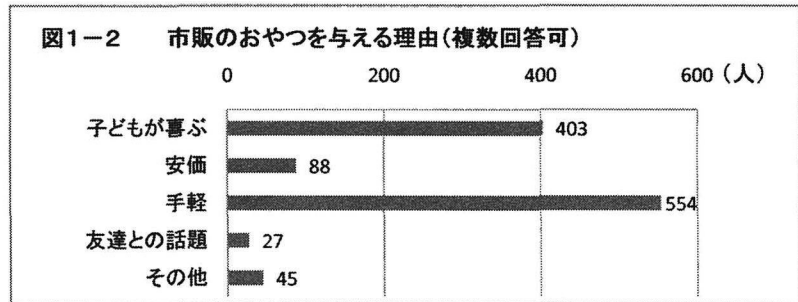
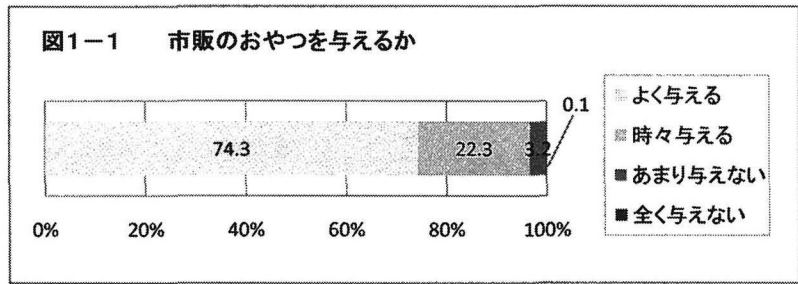
◆市販のおやつについて

「市販のおやつをよく与えますか。」という質問に対して、よく与えると回答した親は74.3%、時々与えると回答した親は22.3%で図1-1のとおりとなっている。現代はほとんどの家庭で市販の製品が利用されていることが分かる。

市販のおやつを与える理由としては、図1-2に示すとおり、「よく・時々与える」親の76.2%（554人）が手軽だからと答えている。

市販のおやつを「よく・時々与える」親が購入時に気を遣うことは、図2のとおりで、子どもの希望又は金額が優先していることが分かる。

市販のおやつを「あまり・全く与えない」親は3.3%で、与えない理由として食育に問題がある・子どもの健康に害があることをあげている。

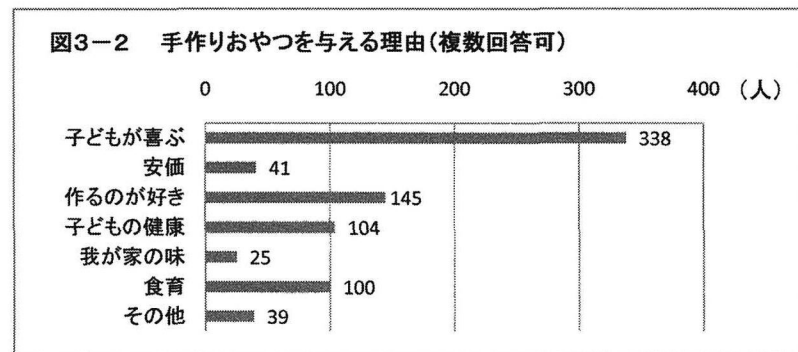
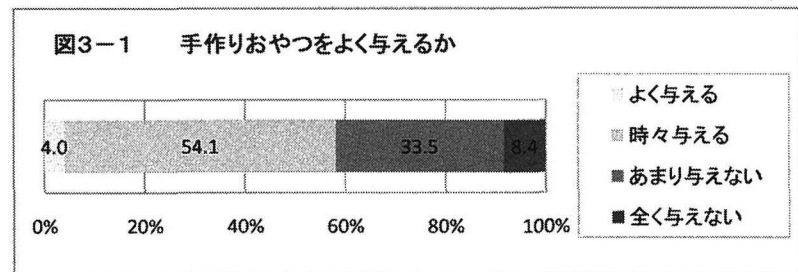
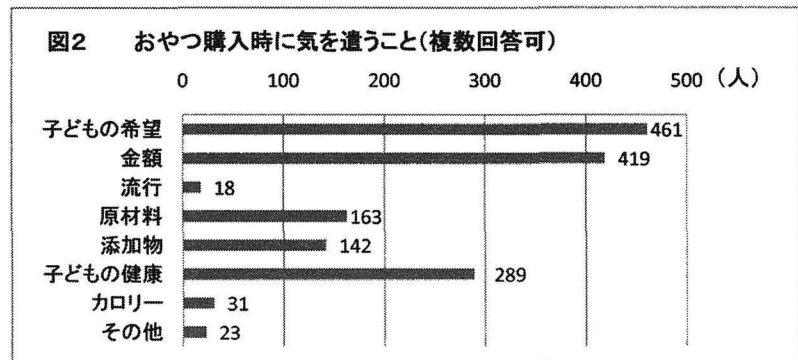


◆手作りおやつについて

「手作りおやつをよく与えますか。」という質問に対して、よく与えると回答した親は4.0%、時々与えると回答した親は54.1%で図3-1のとおりとなっている。保育所に在園している子どもはもちろんのこと、幼稚園でも延長保育などを利用していれば子どもが平日に家庭で過ごす時間が短く、休日を利用して手作り「時々」になる理由も分かる。

手作りおやつを与える理由としては、図3-2に示すとおり、「よく・時々与える」親の77.7%（338人）が子どもが喜ぶからと答えている。

手作りおやつを「よく・時々与える」親が、作る時に気を遣うことは図4のとおりで、子どもの嗜好と作り方の難易度が優先していることが分かる。また、その他の欄で「子どもと一緒に作れるかどうか」を考慮しておやつの種類を選んでいるという表記が目立った。



手作りおやつに選ばれている率の高い順にみると、表1のとおりとなる。手作りおやつを「よく・時々与える」親が作っているおやつとして選んだおやつの種類・人数・割合（「よく・時々与える」親の人数を分母とした数値）を並べたものである。

ホットケーキが群を抜き、ほとんどの家庭で作られていることが注目される。その理由としては、子どもが好む味であること、絵本などでホットケーキの作り方が楽しく紹介されていること、ホットプレートの出現により子どもと一緒に安全に作ることができるようになったこと等が考えられる。

少数派ではあるが、地域の特色あるおやつとして、夏みかん菓子、ところてん、かき餅などが伝承されていることが確認された。

「手作りおやつの作り方は、どんな方法で知りましたか。」（質問4-

⑤）という項目に対しては、親（義父母を含む）と本（雑誌を含む）がセットになっている人が多く、昔ながらに親から子へ伝承されていく形とメディアによって情報を取り入れていくという新しい方法が取り入れられているという意味で時代性を感じた。親や祖父母、姉妹、近所の人、友人から習ったという人間関係をとおして作り方を獲得する一方で、本やテレビ・ラジオなどの情報も新しく獲得しているということが分かった。

手作りおやつを「よく・時々与える」親の5.7%の人が「学校で習った」と回答していることも学校教育を考える上で特筆すべきだと考える。

「親からおやつの作り方を習ったことがありますか。」という質問に対して、48.8%の人が「ある」と答えており、上記（質問4-⑤）の回答とも一致する。

手作りおやつを「あまり・全く与えない」親は、全体の41.9%で、その親たちが手作りおやつを与えない理由として挙げたのは、図4に示すとおり、時間がないからと回答した親が最も多く59.6%（187人）、作るのに手間がかかるからと回答した親が42.7%（134人）となっており、大人（親）の生活における時間的余裕のなさが反映しているように思われる。

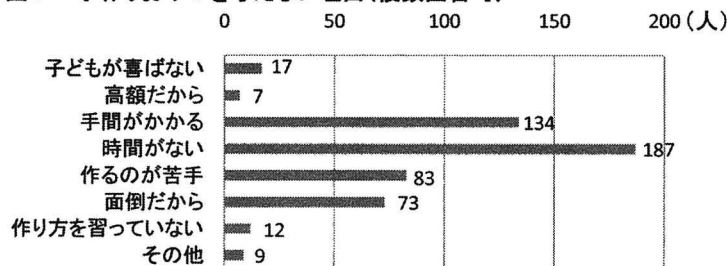
3 まとめ

家庭での食生活は健康維持、成長のために必要な栄養を摂取するという目的の他に、家族とのコミュニケーション、食文化の継承など種々の要素を含みながら営まれ、家族との関係の中で子どもの食意識や食に対する態度がつけられていく（註1）と富岡等は述べており、おやつにおいても同様なことが考えられる。また、根ヶ山光一は、食事場面がしつけの重要な舞台として活用されるのは、食が動物性と文化社会的洗練性両方に片足づつか

表1 手作りおやつの種類

ホットケーキ	375人 (86.2%)	プリン	56人 (12.9%)
焼き芋	205人 (47.1%)	ドーナツ	42人 (9.7%)
ケーキ	184人 (42.3%)	たこ焼き	13人 (3.0%)
ゼリー	139人 (32.0%)	フルーツポンチ	12人 (2.8%)
お団子	132人 (30.3%)	お焼き	11人 (2.5%)
スウィートポテト	109人 (25.1%)	ところてん	10人 (2.3%)
ぜんざい	106人 (24.4%)	クレープ	10人 (2.3%)
蒸しパン	97人 (22.3%)	アイスクリーム	9人 (2.1%)
パン	95人 (21.8%)	おにぎり	9人 (2.1%)
ポテトフライ	94人 (21.6%)	寒天	8人 (1.8%)
クッキー	81人 (18.6%)	芋ようかん	7人 (1.6%)
大学芋	79人 (18.2%)	ジュース	6人 (1.4%)
かき餅	67人 (15.4%)	夏みかん菓子	5人 (1.1%)

図4 手作りおやつを与えない理由（複数回答可）



けた営みであるというところに深い必然性がある（註2）と子どもにとっての食の能動的意味を述べるとともに食の場面は子どもにとってはむしろ遊びの場面という意味合いが強いことを指摘している。

この調査の手作りおやつ項目において、作る理由として圧倒的に多かったのが「子どもが喜ぶから」ということと、作るときに気を遣っていることは、その他の欄で「子どもと一緒に作れるかどうかを考える」という記述がみられたことは、親の意識として「食育」があり、実践している姿とも考えられる。

また、市販のおやつを与えることに関しても「手軽だから」の次に多いのが「子どもが喜ぶから」という理由である。子どもの希望を訊きながら購入するおやつを決めるのは親又は祖父母という家庭が半数を超える。何でも自由に選べる時代に、よい食べ物を選ぶ能力がなければ自分の身体にいいものも悪いものもかまわず食ることになり、健康な生活は保障できない。

手作りおやつで家族とのコミュニケーションを図りながら家庭の味を伝え、一方では市販のおやつを選び方を一緒に考え、一人で買い物をする楽しみへと導いていく。そして、子どもが買い物という活動をとおして地域にコミュニケーションの枠を広げていくことができれば、おやつを与える意義は大きい。

子どもに毎日のおやつをおいしく、楽しく食べさせることはもちろんのこと、家族が一緒になっておやつを選んだり、作ったりすることは家族の絆をも深めることにつながるものだと考える。

時間に追われる大人の生活を見直し、子どもの「おやつ」に目を向けることで、少しだけゆとりを見出すことができるのではないか。そういう身近なことの積み重ねが、子どもの心身の健康と人生を豊かにしていくということを親が認識していく必要があり、社会全体で取り組むことが大切だと考える。

食育基本法の理念を具体化し、家庭やグループ、学校等で進めていけば、健康の問題だけでなく、コミュニケーションや関係性の問題まで解決の糸口がみつかるのではないだろうか。

付 記

本研究は、平成19年度山口福祉文化大学学長裁量経費研究費助成を受けての研究の一部である。

註1：富岡文枝／丸谷美智子／中塚彰子「食生活における親子のかかわりに関する研究」民族衛生第63巻第1号 1997

註2：根ヶ山光一「発達行動学からみた子どもの食発達」小児看護第30巻第7号 2007

参考文献

- 1) 島津奈津『スローフードな日本!』新潮社 2007
- 2) 高畑彩友美／富田圭子／饗庭照美／大谷貴美子「母親の食生活に対する意識や生活充実感が幼稚園に通う子どもとのコミュニケーション頻度に与える影響」日本家政学会誌 Vol.57 No.5 2006